

詩 傍 路

四



村に歸る・木川田義信・
 青・草野心平・
 石隆・吉田・高瀬勝男・
 五の脈・五十嵐節郎・
 五を揺り挽く夢・松本純・
 短詩四篇・中野勇雄・
 私生兒・時島・病院・石川武夫・
 老翁の赤る唇・小林立・
 立にまつる眼・三野澄池

免贈誌・
 ・シ・ス・六・彼等自身・詩を記・
 ・額・額・我克船・真砂・乾杯群・
 ・ハンシュイヤ・
 一〇一

・福島縣石城郡平町古鏡岩町松参着地・

路傍詩社

111926・4・10

中野心平行

同人・石川武夫・松本純・高瀬勝男・

村に歸る

青

のき端のタンタリヒを
 口あんぐりあいて
 和キリとやる

乳房を切つたら
 血がふき上つて
 顔が

俺はこんなに
 大きくなつた

桑の實の様に染つた

木川田義信

すかさず腹を
 突き刺さうとしたが
 青の中心のめりこんで
 しまつた
 女がホトトギスの様に
 笑つた

草野心平

百性・春

・高瀬勝男・

土を喰つて生れた
おん身

その手
その足、に

からまりつく
悩みを捨て、

しつかりと
二本の足

二本の手で
今日の種をまけ

蛙の目色は緑色に
まったん

土の脈

・五十嵐節郎・

白い雪の威圧から逃れた土が
青春の生存を濃く――

――濃く塗り詰めてゆく
土の脈管が、ん々の脈管に伸び

吾は土の自由さ
若々しさを感ある

何んと言ふ季節の表徴
何んと言ふ土の韻律の恍惚なのだ

一匹の猫
――酸漿縛もなほ、葉しそふ猫

暗黒の帳りから、青光りするその眼は
新生の循環に輝き

温い土の生きた
脈にちんちてゐる

土を掘り抜く夢

・和木經心・

夢ほつちに
菜種の夢が咲いた朝

もろさきは百埤の壁
眼は赤蛙のやうにみられて

女の髪の色を透してゐる

鍾詩四篇

・中野勇雄・

・朝・青草
ネクタイピン加キラキラツと光る

・春の月

窓か、昔もなく開いて青衣の女
香水をふきかけてゐる――

青草

土がエンピリの眼かみくらんでゆく

・陽春

緑側に陽を招いた草葉
草葉

私生兒・時高・病院

・石川武夫・

月のない今宵

薔薇の酒を呑み乾す
新鮮な林檎の刺身

サクサクサクサクサクサク

縋々 血を絞る時鳥の声に慄む
真似られて、また繰返す

そのこころ根――
高瀬せる快いオシロイ色は

病院の 青き窓よりにや
耳 耳のなさんや

・春のほるほじあ

・小林直人

春のほるほじあは
黄色からすの甘い投影で
関東地方の赤果の姉妹
白い顔として地獄で
花光虫を飼ふ佛蘭西果物の匂ひで
赤い歯科醫院の歯の虫か
へりうの濡れたシヤツ本を見せる

・土につまる眼

・三野混池

古い土か
新しい土におびえ失した
往意深い闇を打ちぬく眼

ふるふる土

土につまる眼

扉が開ける

みずほろしいその扉か
あう 白い息

・編輯后記。 マット・紙

・まもなく路傍詩も四輯に終る。

・急しかつた收穫のあった編輯后記店で
草野さんや、読算自身の土かさん
会談するやう 混池さんの修燈を
体験して貰うやう 一巻に詩人の
面影をうつろひ見出した四輯であった。
すやう扱いたい詩ばかりなうだから
自身の光を火しうするおる気味。
五輯はモット・モット緊張する。

・親切な諸君の寄贈を注意深く謝す。

—(松本)—

・執筆者諸兄よ！

・路傍詩の資金はあまり心配しなくてもよい
みんな足額です。完結です。—(石川)—

・既成詩壇に向つてジリリ・ジリリ知立藝術の正明
運動を進行す。俺達の生活はいつも若い
土の香りがマダ燃りかき生れた俺達の態度は
いつ迄も純質である —(高橋)—

